

誓い 根府川にて

168 土浦第一高等学校鉄道研究部

「櫓櫓のたたぬ海はなし」

どんな困難でも努力すればなんとかなる、そんな意味のことわざだ。

だが、僕はそうは思わない。

毎日の部活や委員会活動。気がつけば、心と体が疲弊していた。

学校を出て、駅のホーム。なんとなく家に帰りたい気持ちにはならなかった。いつもとは逆方向、東海道線熱海行き。気づいたら僕は乗り込んでいた。

どのくらい時間が経っただろう。空が赤くなっていた。アナウンスが聞こえる。ねぶかわ...？窓の外を見ると綺麗な海が広がっていた。

海に惹かれて、僕は根府川に降りた。

跨線橋を上がり、木造の駅舎を出る。

東京から1時間半とは思えないほどの、のどかな光景。

海が果てしなく広がる。

この広い海になら、僕のちっぽけな悩みが流せるような気がした。

この海だって、櫓櫓で漕がれ続けてきたからこそ、今も輝いている。

いつの間にか僕を縛っていた悩みは消えていた。

日は沈み、夜空に一番星が輝く。

また明日も頑張ろう。

僕は根府川に誓った。